

部門横断型都市政策の検討のためのQOL評価手法の開発

Development of the Quality Of Life evaluation method for cross-government section city policy

佐藤徹治研究室 0824254 長屋潤

1. 結論

まちづくりや都市政策を含む公共政策の究極の目的は、市民のQOL(生活の質)を向上させることにある。このため、QOLの評価に関する研究は、医学、健康行動学、交通行動学、都市計画、等の分野において数多く存在する。

吉田ら(1998)、神谷ら(2011)は、共分散構造モデルを用いて、QOLと都市環境との因果関係を分析している。また、土屋ら(2011)¹⁾は、家庭生活、家計、居住、就業、教育・学習、健康、余暇・娯楽、近隣住民、の観点から市民生活の実態を捉え、生活満足度、幸福度、で定義されるQOLとの関係をロジットモデルを用いて分析している。しかし、これらの研究では、情報リテラシーがQOLに及ぼす影響が考慮されていないなど、市民生活を包括的に捉えた分析がなされていない。

そこで本研究は、QOL向上に資する部門横断型都市政策の立案を支援するQOL評価モデルの構築を目的とする。

2. 研究手順

研究手順を以下に示す。

- ①分析手法の検討 ②分析対象の検討 ③データ収集
- ④モデル分析

3. 分析手法の検討

共分散構造分析とは、項目間の相互依存関係を分析可能な手法である。他の長所として、以下のことが挙げられる。

- ・ 潜在変数は「真値」を表すので、パス係数や決定係数が希薄化しない。
- ・ 潜在変数は相関の高い変数を整理するので、変数選択の悩みを解決できる。

本研究では、項目間の相互依存関係を分析可能な共分散構造分析を適用したQOL評価モデルを構築する。図-1に、モデルの概念図を示す。

QOLの構成指標については、内閣府の幸福度研究委員会(2011)、土屋ら(2011)¹⁾等の既存研究を基に設定する。QOLの構成指標を表-1に示す。

ここで、主観的幸福度の測定の精度が指標群全体の正確性を左右するため、10点満点で測定する。また、現在の幸福感だけで幸福度の実態を捉えるには限界があることから、将来の幸福感予想、人並み感など、五つの指標で幸福度を測定することとする。

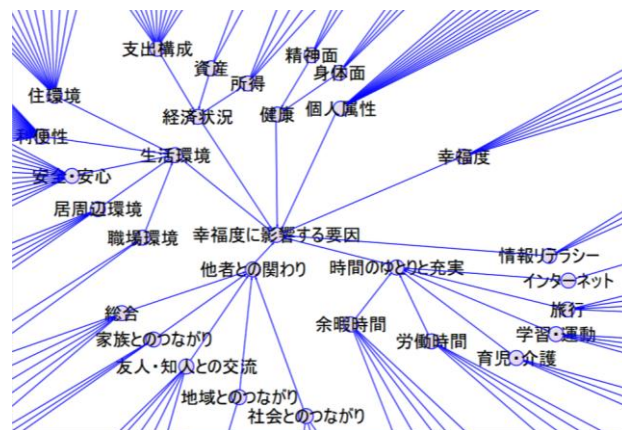


図-1 QOL評価モデルの概念図

表-1 QOLの構成指標の例

構成概念	測定内容	
幸福度に影響する要因	個人属性・Capability	年齢/性別/職業/世帯構成/運転免許の有無/パソコンの所有/携帯電話の所有/自動車保有/学歴/業種/勤続年数
	健康	自己評価の(健康状態。長期疾患状態。日常生活動作(ADL)の支障。)/精神神経疾患/ストレス/希死念慮
	経済状況	可処分所得/物質的幸福の主観的評価/長期失業/純実質保有金融資産/老後の生活不安/世帯の支出構成
	生活環境	住宅への満足度/買い物の不便さ/自己申告の犯罪被害率/水質、大気(においなど)/仕事満足度(充実感)/など
	他者との関わり	孤独を感じる状態/子育て満足度/日常的な立ち話の頻度/地域活動への参加回数/制度への信頼/など
幸福度	時間のゆとりと充実	睡眠時間/長時間労働/待機児童状態/学習の頻度/旅行の頻度/インターネット利用時間/など
	情報リテラシー	(情報収集/情報整理/情報表現)に対する主観的習熟
幸福度	主観的幸福感/理想の幸福感の状況/将来の幸福感予想/人並み感/人生(生活)満足度/(現在の幸福度に対して)その判断基準	

4. 分析対象

本研究では、若年世代を惹き付けるまちづくりの一助となることを想定し、分析対象を学生、社会人とする。

5. データ収集

QOL指標のデータは、基本的に北小金駅前地域、千葉工業大学学内でのアンケート調査により収集する。アンケートの調査項目は検討した評価指標とする。

アンケート調査の対象者は、松戸市のJR北小金駅前地域等に在住の社会人、千葉工業大学の学生とする。

表-2にアンケート調査の概要を示す。

表-2 アンケート調査の概要

対象	調査日	調査方式	訪問数	有効回答数	有効回答率
JR北小金駅前地域などに在住の社会人	2011年12月17-19、27・28・30日 1月1日	自宅訪問 インタビュー	520	20	3.8%
学生	1月10-11日	インタビュー	30	20	66.7%

6. モデル分析

アンケート調査、統計調査で得られたデータを用い、共分散構造分析により各パス図に対してパス係数の推定を行う。各パス図は「幸福度を左右する要因」における各項目と、幸福度、が1対となっている。推定は多くの潜在変数・観測変数の組み合わせで行い、適合度(χ^2 乗値、p値、GFI)を考慮して採用パス図を決定する。図-3~図-5に、パス係数として採用された推定結果の一部を示す。

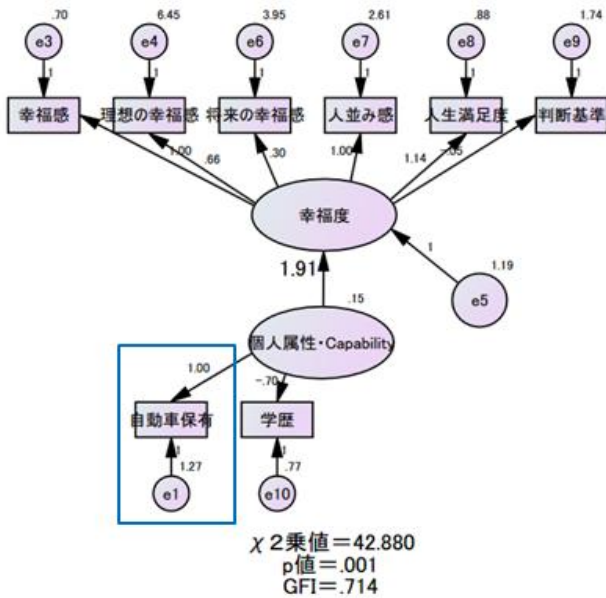


図-3 学生:パス係数が最高の要因:個人属性・Capability

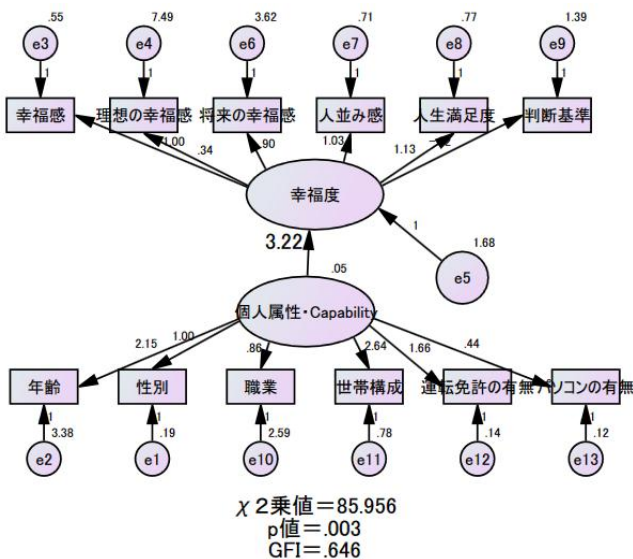


図-4 社会人:パス係数が最高の要因:個人属性・Capability

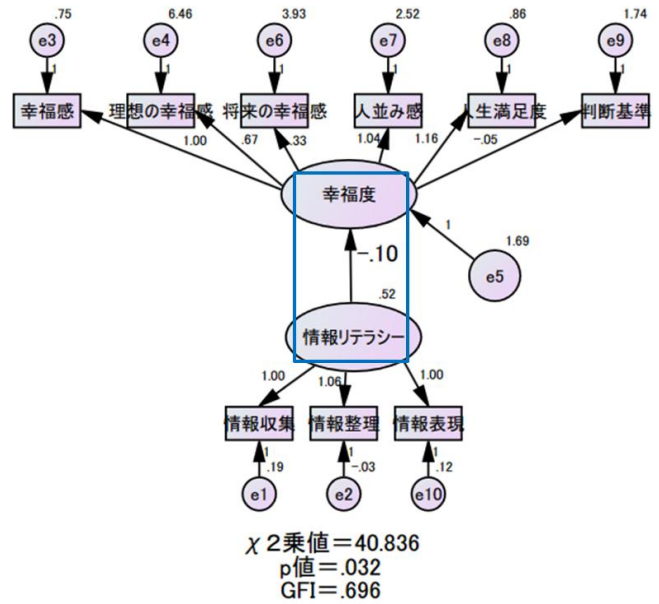


図-5 学生:幸福度に影響する要因:情報リテラシー

図-3、図-4より、学生の個人属性・Capabilityの指標の中では、自動車保有のパス係数が比較的高く、若年世代を惹き付けるまちづくりを行うためには、自動車の保有しやすい環境を尊重することが望まれる、と言える。

また、図-5より、大学生では情報リテラシーから幸福度へのパス係数が、-0.10となっている。このことから、情報リテラシーが幸福度を左右する度合いは比較的小さい、習熟に対する自己評価の高い人は幸福度を高く評価しない傾向がある、ことが分かる。この要因として、情報を活用できるようになるにつれて、自分に不足しているものが意識されやすくなり、自分の幸福度をそれほど高く評価しない傾向が生じる可能性が考えられる。

7. まとめと今後の課題

本研究では、QOL(生活の質)を表現する評価指標と構成概念を検討した上で、学生および社会人を対象とするアンケート調査で収集した回答データを用いてQOL評価モデル(≒本研究で描いたパス図)のパス係数を推定した。その結果、学生および社会人の幸福度の要因、各要因の影響力を検証することができた。

今後、若年世代を惹き付けるまちづくりの議論の材料とするため、より多様な学部(多様な分野の人たち)からより多くのサンプルを収集することで、説明力の高いモデルを構築することが課題として挙げられる。

参考文献

- 1) 土屋善之・張峻屹・藤原章正・力石真(2011):市民生活行動調査の提案とQOLの評価、土木計画学研究・講演集(CD-Rom)、Vol.43、279